

主な参考文献	初音	玉鬘	少女	槿	薄雲	松風	絵合	関屋	蓬生	滯標	明石	須磨
.....
255	248	231	210	190	176	159	145	139	130	111	66	4

須磨 すま

鳥辺山燃えしけぶりも紛ふやと海士あまの塩焼く浦見あまにぞゆく

鳥辺山に亡き妻、墓上を葬ったあのとときの煙にも似てはいまいかと、海人あまが塩を焼く煙を須磨の浦に見にまいます。

「鳥辺山」は、京都東山の西麓にある地で、古くから火葬場・墓場のあった所。墓上はここで茶毘に付された。「紛ふ」は、見間違え、聞き間違うほどよく似ている状態にあること。「海士」は、漁業に従事する人で、後世は、もっぱら海にもぐって、貝や海草などを採る女を意味し、「海女」とも書く。「浦見」に「恨み」を掛ける。

「世の中いと煩はしく、はしたなき事のみまされば」と須磨の巻は書き起こされる。源氏の絶対的な保護者であった桐壺院の崩御の後、朱雀帝の御世となれば、その生母弘徽殿太后、外祖父右大臣方に政治的権力が移行するのは当然の理である。藤壺は既に出家し、左大臣は致仕ちじ（官職をやめること。辞任）の表を奉つて家に籠り、朧月夜との密通が露見した後の源氏の身辺は、急激に騒々しくなっていく。細流抄に、「廿四歳の秋より廿五歳の春迄の事物語に見へず、此内に源の除名

（除名とは成きたれる官位を除く義也―湖月抄）などの事などあるべし。袖卷の末の弘き殿の造意より、遠流あるべき定なども有けるにや」とある。後に、螢兵部卿宮（桐壺院の皇子、源氏の弟）や頭中将が源氏のもとを訪れたとき、「位なき人は」といつて、無紋の直衣姿で出会う場面がある。無位の者は文様のない着物を着るのが決まりだったのである。今や源氏は官位を剝奪され、遠流の刑にまで処せられようとする状況下にあった。源氏は勅勘の汚名を蒙る以前に須磨に退居することを決意した。離京が発覚すれば右大臣側は逮捕という挙にも出よう。畿内の西端の地、海人の家すらまれたという須磨に、最愛の紫上も伴わず、わずか七、八人の腹心を供にして下るのである。

三月二十日過ぎの出立に先立って、網代車あじろを女車のように仕立て、源氏は夜陰に乗じて左大臣邸へ暇ごいに出掛けた。その夜は左大臣や頭中将らと別れの宴を持ち、夜の明けぬ暗い内に邸を去ろうとする源氏に大宮から手紙が届く。「自らも聞えまほしきを、かきくらす乱り心地ためらひ侍る程に、いと夜深う出でさせ給ふなるも、さまかはりたる心地のみし侍るかな。心苦しき人のいぎたなきほどは、暫しもやすらはせ給はで」と尼君はいう。「心苦しき人」とは、源氏が故墓上との間にもうけた若君（後の夕霧）のことである。大宮として源氏と言葉を交わし、墓上のことなども懐かしみ、語り合いたかつたであろう。が、男どもの席ゆえ遠慮したのである。大宮のもとには立ち寄らずに帰ろうとする源氏に、せめて若君が起きるまで待つていただけまいかと、若君の乳母、宰相の君を使に立てて大宮が請うたのである。掲出歌は、その文に対して返歌ともなく口ずさんだ源氏の歌である。墓上を葬った煙が須磨の浦の塩を焼く煙に似ている。それを見て墓上を偲ぼう、とい